こんにちは。本日は、このような場にお招きいただきまして、大変、光栄に思っています。

日遊協の深谷会長さん、その経営されるフシミコーポレーションとは、日ごろから大変親しくお付き合いさせていただいております。先日も、名古屋に立派なお店をオープンされたというので、私もそのお祝いに行きました。お祝いに行ったのはいいんですが、私、最近のパチンコというものはまったくやったことがありません。若いころやったのは、当然、手打ち式です。いっぺん最新のやつをやってみたいと思っていたものでしたから、ちょうどいい機会というので、機械の前に座ってみました。ただ…これがまったくわからへん…のですな。隣に座っていたおばちゃんが、「わー、そらあかんでー」と、叫びながら、「こうやらなーダメや」と、親切に教えてくれるんですわ。そしたら、ほんまにわーっと、玉、ぎょうさん出るんですね。こんなこと、過去にも経験したことのないことでした。いや、実に楽しい経験をさせていただきました。

本日の皆さんの研修の目的というのは、このような楽しい時間を、多くの国民に提供する、ほんとになくてはならない業界であると、誰もが認めてくれるような産業になるために、ホール、機械メーカー、販社などいろいろな関係業界の皆さんが一堂に会してディスカッションを行なう、ということです。そういう皆さんにお役に立つかどうかわかりませんが、私の半生をささげたラグビー人生の思い出の中から、関連のありそうないくつかのエピソードをお話したいと思います。

講演「熱き想いが壁を破る！」

元伏見工業高校ラグビー部監督・京都市スポーツ政策顧問　**山口良治**

世の中は理不尽、人間は弱い 誰も同じと知れば力が出ます

「第6回遊技産業マネジメント・カレッジ」1日目の9月27日、元伏見工業高校ラグビー部監督の山口良治氏が「熱き想いが壁を破る!」と題して、講演を行いました。山口氏は、ラグビー全日本代表として活躍し、教育者としても無名の伏見工業高校を日本一に導くなど、その情熱と献身でラグビー界のみならず広く尊敬されています。講演は身振り手振りも豊かに、人生のあり方を文字通り熱く語りました。その講演要旨を再録します。

日本代表の誇りも「何ぼのもんじゃい」

私は、高校、大学とラグビーをやり、1966年からは日本代表に選出され、74年現役引退後、伏見工業高校に赴任しました。数々の海外遠征、2度にわたるアジア競技大会優勝など、自分なりにラグビー日本代表としての誇りを持っていました。その私に対して、ある生徒は、「日本代表?、カネでも持ってたんとちゃうか」といいました。

日本代表。そう簡単になれるものではありません。1回だって選

ばれるのは大変なんです。それを8年も続けた。私の顔、ここだけでも30針縫っています。歯は、全部入れ歯です。さし歯です（笑）。いま脚光を浴びるサッカー選手とは違います。賞金もありませんでした。アジア大会で優勝しても、空港に誰も迎えになんかきてくれません。日本代表、その誇りだけでした。

74年、そんなわたしが、京都市の教育長から「伏見工業高校に赴任を命ず」という辞令を受け取った。教育長の「頑張ってくれたまえ」との言葉に、「はい、頑張ります」と胸を張ったものでした。高校の内情については、うすうす聞いておりました。が、実はラグビー部があるというので、内心ホッとしていました。あの苦しいスポーツをやるものなら、必ずどこかで分かり合える、というような確信があったんです。他の生徒はいざ知らず、ラグビー部員たちだけは、大喜びで私を迎えてくれるものと思っていました。

今でも思い出します。鴨川を渡ると、伏見工業高校の校門があります。そこから、生徒が、私を迎えに走り出てくるものと思ってました。ところがどうです。誰も迎えに来ない。グラウンドかな、と思って、グラウンドに出てみましたが、そこにも人影はない。ゴールポストもない。誰もいなかった…。担任のクラスの生徒の前で校長先生から紹介がありました。「山口先生は、ラグビー全日本の代表選手として活躍された方。そんな先生がこの学校に来てくれたのだから、君たちもしっかりやらなくてはいけない云々…」。校長先生の言葉に、神妙に聞き入るかと思ったら、生徒たちから返ってきたのは、「全日本が何や。給料、何ぼのもんじゃい！」「3000万円くらいもろとんの？」。いやもう、冷たい歓迎でしたな…（笑）。

時々、鋭い口調で聴衆に迫る山口良治氏

練習に誰も来ない「先輩に行くなと」

それでも、気を取り直して、75年からラグビー部の監督を引き受けました。最初の練習のときです。こちらは前の日、眠れませんでした。こいつらに、こんなことしてやろう、こんなこと教えてやろう、という想いが頭の中を駆け巡っていました。放課後、気合をいれてグラウンドに行きました。すでに野球部の練習も始まっています。サッカー部の練習も始まっています。では、ラグビー部はとみると、誰もいません。

どうした？教室で待っているのか。生徒たちを捜しに行きました。1年生のラグビー部員2人が道端に座っています。「おーい、きみたち、何で練習せんの」とたずねたら、「すみません。先輩に、行くなって言われているんです」。上級生に脅されていたんですね。こんな状態だったんです。「よし、そんならそんな先輩、ほっておこう。いまから、稲荷山に走りにいこう」と、1年生2人を連れて、近くの稲荷山に行きました。途中で、もう1人1年生がおりました。声を掛けると、最初は逃げようとするんです。何とか捕まえて「これから、みんなで山に走りにいこう」と言ったら「はい、行きます！」と意外に素直についてくるんですね。最初の練習は、実はこうしてたった3人の1年生をつれて、伏見稲荷の階段を走ること、ただそれだけでした。

花園に112対0「チクショウ！」の声が

大会の季節になりました。75年の京都府春季総合体育大会。あろ

うことか、ここでラグビーの名門中の名門、花園高校と対戦することになりました。私も現役時代、何度かコーチしたことがあります。その実力は、並ではありません。そうはいっても、「相手も同じ高校生や、全力で当たれ！」、負けるのはわかっていましたけど「負けんなよ！」と檄を飛ばしてやりました。

生徒たちは「ほな、いこけー」とか、およそ気合の入らない雰囲気で、グラウンドに散っていきました。試合開始のホイッスルがなります。その途端、再びホイッスル。試合開始からたったの数十秒で花園高校トライです。珍しい試合でしたね（笑）。その後はもう、一方的なトライの連続。まともなタックルひとつできない伏見工業。私も、かっかとなりましたが、どうすることもできない。途中で帰ろうかと思いました。

でも、足がすくんで帰れない。花園のトライのたびに湧き起る拍手に、「ざまーみろ、山口。全日本代表だって、何もできんやないか」と言われているような気がしました。50対ゼロ、70対ゼロ、80対ゼロ…。私は生徒に何を教えてきたのか。「メチャクチャやられて、悔しいだろうなー」生徒たちの気持ちを考えると、自分こそ、なんて冷たい教師だったんだ、ということに気付かされました。オレは全日本の選手だったんだぞ、お前たちの監督なんだぞ、教師なんだぞ、という、私の驕り。これでは生徒はついてこれません。一方的に、やられる生徒たちをみて、初めて自分の間違いに気付きました。ホントに涙が出ました。

第80回全国高校ラグビー選手権で優勝し、胴上げされる山口総監督（2001年1月7日・花園ラグビー場）＝報知新聞提供

試合は、結局、112対0。生徒が帰ってきます。タックルも何もしないものだから、パンツは真っ白。負け犬根性丸出しで、照れくさそうに、グラウンドに座っていました。「みんなご苦労さん。怪我はなかったか」。私は静かに言いました。「ラグビーで100点以上というのは珍しい試合やな。同じ高校生同士だというのに、くやしくはないか」そこまで言ったとき、「112対0で、悔しいとは思わんか！」と思わず怒鳴っていました。

みんなシーンとしていました。1人の2年生がようやく「チクショウ」と叫んだんです。それを聞いて、次々に「チクショウ！」「悔しい！」と、生徒たちは叫びだしたのです。やっと、ふがいない自分に気付いて、「くやしい！」と叫んだのです。やがて、みんな泣いていました。日本一の花園高校に勝つ！、日本一になる！。この瞬間、日本一になるという目標が生まれたんです。

身ぶりも大きく熱弁をふるう山口氏

1年後、県大会優勝 愉快なハプニングが

伏見工業が112対0で負けたその日から1年後、県大会の決勝戦。伏見工業は18対12で花園に勝ちました。雨の激しく降る中、泥んこだらけの試合でした。表彰式。愉快なハプニングが起きました。大会役員たちは、すでに「優勝花園高校」「準優勝伏見工業」という表彰状を用意していたんです。ところが、結果は大逆転。大会役員が大慌てで、新しい表彰状を用意しながら、あての外れた2枚の表彰状を大きな音を立てて破いていました。いや、面白かったですね…。みんなで腹を抱えて笑いましたよ。

その後の伏見工業の快進撃は、ラグビー界にとっていまも語り草です。78年＝近畿大会準優勝、79年＝全国大会ベスト8、80年＝国体優勝、全国大会優勝…。それまで、まったく無名の、ダメなラグビー部が、112対0の屈辱から這い上がり、1年で花園を破り、5年で全国制覇するまでになりました。

業界が大変だ、会社が苦しいというのは、誰の責任でもない。自分の責任なんです。他人と同じに、グーグー寝ていては、何も変りません。お酒を飲んでいても、あの看板どうしたら、もっと目立つようになるのか、考えることが大切です。プロとして、自分の仕事を見つめなおし、それに自分で納得できるかどうか。この業界をどうしたいのか。多くの先輩たちの熱い想いを、どう受け継いで行ったらいいのか。常にそれを想うことです。

夢を語りなさい。こうなったらいいな、ああなったらいいな。そういう熱い想いを持たなくてはいけません。熱い想いがあれば、いろんなことが、湧いてくるんです。世の中には、ビジネス本が溢れていますね。こうやれ、ああやれと、いろいろ教えてくれる。でもそれだけで分かったつもりになっていてはダメなんです。

ラグビーでも、いまはいろんな練習本やビデオがたくさんあります。ニュージーランドではどうだとかなんだとか。しかし、それをまねするだけでは、絶対にニュージーランドには勝てませんよ。やっぱりそこには創造性というものが必要なんです。ああしたらいいかな、こうしたらいいかな、いろいろ考えてみる。そこから、創造性が生まれてくるんです。それを引き出すものこそ、1人ひとりの熱い想いなんです。

常に気を配れば 問題解決できる

見えないものをみる。今日、この研修にお集まりの皆さんも、自分のところにない、見えないものを吸収して、学びあっていただきたい。目に見えないものを、どうしたら感じあえるのか。皆さんのお店に来るお客様に、どんな感じを与えているのか、またあの店に行こうという気持ちになってもらいたい、という熱き想いが大切なのだと思います。私のいた教育現場でも、問題はたくさんありました。ほんとの親でさえ、子どもが今何を考え、何を感じているのかわからなくなっています。

1人ひとりの生徒に、どうした?、今日は元気ないな、なんかあったのかな、こうした思いがあれば、生徒からいろんなものが、いっぱい引き出せるはずです。ところが、そんな想いをもって、教育現場に立っている教師や親がいったいどれだけいるでしょうか。

私のいた伏見高校ラグビー部には120人の部員がいました。一番多い時は200人、全校生徒の2割が集まったときもあります。

一方で、伏見工ラグビー部は、「山口収容所」なんて呼ばれて、恐れられていました。何でも、「一度入ったら抜けられない」からだそうです。理不尽とまでいわれた猛練習だけではありません。奔放な生徒たちからすれば、さまざまな規則が、まるで「収容所」と感じられたのかもしれません。それでも、強くなりたい。ラグビーで勝ちたい、という熱い想いがあれば耐えられる。やがて猛練習もうるさい決まりも、苦にならなくなる。

他方、いまは家でも学校でも、大人たちが無関心をよそおい、子供たちから1メートル遅れて、ついて行くような状態です。こんなことでいいのでしょうか。

ラグビーを強くするというのは、ほんとに大変です。1人ひとりの生徒に常に気を配り、その気持ちをつかんでいなくてはなりません。「オハヨー」これだけでも元気を感じます。「オハヨー」その声を聞いて、あれ今日はなんか元気ないのと違う？　何でかな？　と考える。問題があれば、何とかそれを解決してあげる。こういう実践が重要なんですね。こういう実践がなくては、元気な社員、元気な職場は生まれません。元気のない職場では、どんな機械を入れても、お客様にも来ていただけません。

自分自身に、職業に愛がなければだめ

理不尽に耐える。仕事でも、何でこんなことまでせにゃならんのか、こういうことはままあることだと思うんです。考えてみれば、人間、生まれた瞬間から、理不尽なことばかりです。ただ、小さいころは、母親や爺さん婆さんが、庇ってくれる。しかし、大人になると、そうは行かない。金をもらうようになる、プロになる。こうなったら、もう理不尽は当たり前や。では何でそれに耐えられるか。それは、自分に対する愛です。自分の職業、自分の会社に対する愛だと思うんです。男は、やはりこうした愛がなくてはダメです。

私は福井県に生まれました。小学校1年、7歳のとき、母が死にました。悲しかった。毎日、めそめそ泣いていた私に担任の女の先生が「山口君、頑張るんやで」と肩をたたいてくれました。良く覚えています。この先生、今、80歳になります。最近、このころの通知簿が見つかりました。いや、ひどい成績評価でしたね。こんな成績しかつけてくれんかったのか、と呆れてしまいました。でも、そんなことは関係ない。成績のことなんかすっかり忘れても、あのときの先生への感謝の気持ちは今も変りません。

福井というのは、ラグビーではまったくの後進地域です。中学時代は、ずっと野球をやっていました。福井の砂浜をよく走らされたもんです。足が遅く、いつもビリ。それで、キャッチャーになりました。キャッチャーなら、足が遅くてもなんとかなると思ったんです。身体もあまり丈夫なほうではありませんでした。ただ、負けん気は強いほうでした。高校へ進学したら、野球部がありません。仕方なく、ラグビー部に入ったんです。

地獄の練習に耐えはじめて見えてきた

そのとき初めてラグビーボールを見ました。ラグビーは後ろにしかパスができません。えらい理不尽なスポーツやな、と思いました。それでも頑張った。大学は、日大を選びました。当時、日大が学生ラグビー選手権で優勝したからです。どうせやるんだったら、日大。そこで、日本一になる。そう思って、日大に入ったんですが、そこはもう地獄でした。

その後、体育教師になるため日本体育大学に移りましたが、ここのラグビー部は、もっとひどい地獄でした。でも、頑張った。いずれもラグビー部には100人からの部員がおりましたので、レギュ

菅生健人が右隅に先制トライを決めた（2006年1月6日・花園）＝報知新聞提供

ラーになるのは大変です。それでも、なんであんなやつがレギュラーなんだ、あいつには負けん、とライバルを見つけては歯をくいしばったんです。

2年生のときの北海道合宿。始まる前は、まだ4軍と5軍の間でした。ピーという笛を合図に、ダッシュ。初めは、あんな奴らに負けるもんか、と思っていましたが、練習はいつまでも終わりません。いったいいつまで走らされるのか。やがて、誰かがぶっ倒れる。OBの先輩が水をぶっ掛ける。当時は練習中は水なんか飲ましてくれませんから、倒れた奴がうらやましくてならない。オレにも水をぶっ掛けてくれへんかな、なんて考えながら、走る。やがて、ライバルの顔も何も目に入らなくなる。もう自分だけ。必死に耐える。練習が終わる。その時、ようやく気付いた。ようやくみんなの顔が見えたんです。

いじわるな4年生の先輩も、ライバルの3年生の先輩も、みなぐしゃぐしゃな顔をしていました。100kgもの巨漢も、小さいのも、みな苦しそうでした。みんな苦しいんだ。みんな同じなんだ。この〝気付き〟が大切です。この2年生の合宿練習の終わり、レギュラーメンバー発表がありました。私はいきなり1軍に抜擢され、レギュラーとなりました。

全国高校ラグビー六日目、準決勝、伏見工vs東海大仰星、前半4分伏見工の右ウィング

お客様が「いい人やな」それが業界を変える

仕事の辛さ、業界の大変さ、わかります。でも、それって誰が決めるのでしょうか。自分ではありませんか。もう走れん、というところまで走っても、気持ちをちょっと変えただけで、もう少し走れる。自分が変れば、もっと走れるんです。人間は弱い、ちっぽけなものですよ。ちょっとハードな練習になれば、誰もが悲鳴を上げる。あなただけじゃない。誰もがそうなんです。みんながそこで頑張っている、ということがわかれば、そこからさらに力が湧いてくるんです。

職業への誇り、お客様への感謝の気持ち、みなそういうところから生まれてくるのではないでしょうか。全日本の代表のとき、大怪我をしたことがあります。顔を30針縫った。ヨメさんがそれをみて、ギャーと叫んだくらい。でも、この痛み、このしんどさ、いったい誰が決めるのでしょうか。多少の痛さ、しんどさは、自分でどうにでもなるんです。世の中は思うようにならない理不尽なことでいっぱいです。でも、自分に熱き想いがあれば、それを乗り越えられる。そんな熱き想いをもって、仕事に励んでいただきたい。

業界の社会的地位の向上ということが、いま大きな課題だそうですね。会長さんもいろいろ頑張っておられるだろうが、結局は皆さん1人ひとりが働いて、お客様に、いい人やな、と感じてもらえる、そういうことが積み重なって、期待される業界になるのではないかと思います。仕事だけではありません。家族、子供たち、この人たちに、なにを伝えていくのか。熱き想いをもって、接することが、必ずやいい結果を生むことにつながると思います。元気の「気」、それがみなぎる「顔」が大切です。みなさん、頑張ってください。

略歴

山口　良治●やまぐち・よしはる

1943年福井県生まれ、日本体育大学卒、若狭農林高でラグビーを始める。1967年フランカーとして日本代表チームに入り、闘志あるプレーで観客を魅了した。1974年京都市立伏見工業高校の教職に付き、ラグビー部監督に。無名だった同校を1981年全国大会で優勝に導く。2006年4度目の高校ラグビー日本一。現在、京都スポーツ政策顧問・京都アクアリーナ館長、浜松大学教授